

もっと知りたいふるさと

71

石井の手児

人皆の言は絶ゆとも埴科の石井の手児が言な絶えそね
 (万葉集卷十四3398相聞)
 大意：世の人すべての言葉の行き来は絶えようとも、埴科の石井の手児の言葉はどうか絶えずに寄こしてください。



石井の手児の万葉歌碑

十代の頃から、父に倉科に万葉歌碑があることは何度か聞いていた。高校の国語教師だった父は、自分でもアララギ派に属し短歌を詠んでおり、『万葉集』については二松学舎大学時代の父の恩師である森本治吉先生の万葉集研

究のことを話してくれていた。その代表的著作の『萬葉集の芸術性』(昭和16年：修文堂)は今も私の書庫に収められている。

大学1年の頃であったと思う。私は倉科の石杭という地籍にある「石井の手児」の万葉歌碑を自転車で訪れた。暑い夏の日で、蝉時雨の降る午後であった。

それから約半世紀後、私も短歌を始めており、短歌結社「綱手」の主宰であった田井安曇先生に誘われご指導をいただいた。田井先生は私が教員生活で最後に赴任した飯山北高校の卒業生で、統合飯山高校の新校歌を作る際、作詞をお願いした縁から師弟関係が始まった。父はずでに上へ、

田井先生も彼岸に旅立たれた今、私は「石井の手児」を再び訪れたいという思いが募った。晩夏であったが真夏のような暑さであった。

大日堂園地の一角の泉のほとりにその歌碑は変わらぬ佇んでいた。大日堂は寛文13年(1673)に、松代城初代城主真田信之の次女康子が



大日池と万葉歌碑

如来を祀る堂として建立された。「石井の手児」の歌碑は、松代藩第6代藩主真田幸弘のお抱え歌人学者の大村光枝一門が1700年代にこの大日堂の泉のほとりに建立したと伝えられている。

「石井」が転化したものではないかという「石杭」という地名。この石杭にある大日堂の歌碑が時を経て文字が読みにくくなってきたとの思いや、もっと多くの人にこの万葉の歌碑を見てもらうには人が集まる場所がよいのではないかとの思いから、平成3年(1991)、倉科区民によってこの歌碑は新しい意匠を施されて倉科公民館に建立された。そのとき関わっておられた原利夫氏によれば、その中心となったのは宮下信勝氏、揮毫は杉本なほみ氏であつ

た。新しい「石井の手児」は黒御影石の立派な歌碑である。眺めていると、文化遺産をしっかりと未来世代に引き継ぎたいという倉科区民の高い志と熱い思いが伝わってくる。ちなみに、大日堂園地には西行の歌碑もある。信濃なるあかしの松のありながらなそくらしなの里といふらむ

政治動乱の中、世を捨てて旅を続けた西行の寂寥感溢れる歌に比して、「明科」と「暗科」とも読めるこの歌には何かユーマアが感じられる。千曲市内には、「万葉橋」という名の橋もあり、紹介し

た歌碑の他にも万葉の歌碑が多くある。万葉の歌は、おおらかで芸術性豊かな千曲市によく似合う。

土口 米澤修一

